

研究論文

大学生の成人感の変化についての検討

— 発達段階における阻止因・発生因から —

杉 宮 光 海

Hiromi Sugimiya

問 題

1. はじめに

我々は法律によって20歳で成人すると定められている。20歳になれば飲酒、喫煙等、これまでは禁止されていた事が可能となり、少年法による個人情報保護や納税等これまでは免除されていた事を個人の責任として負う事となる。新成人たちは、大人としての自覚を持ち生活していかなければならない。しかし、実際にはどの程度の人が大人としての自覚を持つのだろうか。このような自分が「大人である」という感覚を「成人感」と言い、近年この成人感の低さが問題視されている。

2. Eriksonによる青年期の発達課題とモラトリアム

20歳の若者たちは青年期に位置する。青年期は子供から大人への移行期とされており、この時期は身体の急激な成長や性的な成熟、男女差の増大等身体的変化に伴い、心理的变化や人間関係にも大きな変化が訪れる。人生においてその節目ごとに達成が期待される課題が設定されている。これを「発達課題」と言い、1940年代にHavighurst (1953) が提唱した概念である。

アメリカの心理学者Erikson (1959) は、人を中心とした社会的関係のやり取りの中で自我同一性を形成していく心理・社会的発達課題を提唱した(齋藤、1996)。Erikson (1959) によると、青年期では「自我同一性 (アイデンティティ) 対自我同一性の拡散」が発達課題とされている。「自我同一性 (アイデンティティ)」とは、「自分とは何かという問いに対する確信的な答え」の事であり、これを達成するか否

かを青年期における心理社会的危機とし、失敗・拡散した状態を「自我同一性の拡散」とした。また、Erikson (1959) は青年期を特徴づけるものとして経済用語でもある「モラトリアム」という概念を提唱した。経済学での「モラトリアム」は債務の支払いを一定期間猶予する事を意味し、心理学では、「青年期を社会的な責任・義務から免除された、アイデンティティを確立するための猶予期間」として捉えていた(向田、2017)。

3. モラトリアム人間

しかし、今日の「モラトリアム」はErikson (1959) が当時提唱したものとは異なっているとされている。小此木 (1978) は自身の著した「モラトリアム人間の時代」の中で、時代と共に青年期の位置づけが変化し本来のモラトリアムの目的は希薄化してしまったと述べている。さらに、現代のモラトリアムにある青年を「モラトリアム人間」と表現し、以前は自立する事を求めていたが、現在では自立への渴望はなく、寧ろモラトリアムに居直っていると提言している。早く自立する事を望みアイデンティティを確立するはずだった青年は、モラトリアム期間にある事を自己主張し、そこから脱出する事を先延ばしにするようになり、彼らは「モラトリアム人間」と名付けられた。「モラトリアム人間」は青年自身でモラトリアムに居続けようとする意識が原因の1つだが、その根本には青年がその意識に至るまでの社会の大きな変化が存在する。

4. 近年の青年たちの問題

かねてより若者の自立意識の低さが懸念されている。このテーマでの研究は数多く行われており、事の重大さを物語っている。「パラサイト・シングル」「ニート」「フリーター」「ひきこもり」等の言葉が誕生し、政府はこれらの問題を解決するために若者の雇用問題に関する様々な対策を行っている。中でも青年期にあり、学生である者の多くにはモラトリアムが与えられている。本来この期間は学生の自立の準備期間であるが、当の本人たちにその意識があまり見られない。

菊池・安達（1985）は、高等教育機関としての大学が、その教育実践の前提としている「学生像」と現実の学生の意識や行動の諸相とが著しくかけ離れたものになってしまっているという事実に端を発し、青年の「成人感」について研究を行った。大学生の多くは18歳から22、23歳に位置する。1、2年生は間もなく成人を迎える立場であり自分が大人に近づいていることへの意識を持ち始め、3、4年生は成人して社会的に大人になった事で意識の変化や、大人として行動する等の変化が見られるのではないかとと思われる。しかし、今日の学生にそのような変化は少ないようである。菊池・安達（1985）は一例として教育実習での出来事を取り上げている。教育実習では、実習を受け入れてくれた学校への配慮は欠かせない。そのため実習前の学生に対し、挨拶や言葉遣い等、事細かく指導する。本来ならこれらは学生自身で気を付ける事かもしれない。しかしこれには大学側の「学生はもう1人前の大人であるといった思い込みや期待は通用しないという考えがあるため」と述べており、学生の意識の低さを理解したうえでの手厚い対応だと提言している。菊池・安達（1985）は、学生自身も大学側のそのような子ども扱いにほとんど抵抗を示さない事を憂慮し、これは教育学部の学生に限った事ではないとしている。

5. 高校と大学の違い

現在では高校卒業後は大学へ進学する事が一般的とされる全入時代である。保坂（2015）は、大学3年生数名に大学生になってから変化した事を中心としたテーマで大学生自身に語らせ、学生は自らが「大学生であること」をどのように意味づけているのかについて検討した。その結果、高校までは主に受動的であった自分を、大学からは主体的になろうと努力し葛藤する様子が見られた事を報告している。高校までは与えられ、それに向けた行動は自分で選択する事はできたが、その行動を選択するに至ったのは、そうする流れがありその雰囲気にも自分も従ったということだった。一方、大学生になると目標が与えられる状況は無くなり自ら目標を設定し行動を選択していかなければならない。学生自身この変化を自覚しているものの主導者を求める自分とその状況に応えたい自分との間で板挟みにされているのである。しかしこの状態も学年が上がる毎に解消され、入学当初に感じる高校の頃との違いや目標を与え自分を引っ張ってくれる人の不在による不安等、当時の感想が語られたのではないだろうか。

6. 社会経済的变化による学生のモラトリアム延長

近年は就職活動時期の早期化・長期化が問題視されている。森田（2015）によると、本田（2010）は2005年以降の就職活動の早期化と長期化、加えて、企業側と学生側の双方による厳選化が学生に肉体的精神的負担を与えている事を示している。先述したように、保坂（2015）は学生らが主体的になろうと努力し葛藤している事を指摘している。しかし、就職活動の早期化はこの葛藤の時間やモラトリアムの時期を短縮もしくは消去する恐れがあるのではないだろうか。冒頭の内容に戻るが、Erikson（1959）は青年期には自我同一性を確立し自分を見定める事が必要であるとした。小此木（1978）は時代と共に変化する青年期に位置する青年をモラトリアム人間という言葉で表現した。現在までに、青年期に位置する学生にとってモラトリアムは必要な期間として

確立され、その事は社会的に認識されている。しかしながら社会は学生のその期間を待たないのが現状である。保坂（2015）の示すように、大学入学後は高校との違いに多くの学生が戸惑ってしまう。社会経済的変化に対応するためにモラトリアム人間となった学生のモラトリアム期間は、これらの社会からの圧迫によってさらに延長されるのではないだろうか。社会的状況の変化による学生の意識の変化、それに伴って学生を支援するために動く大学からの学生への手厚い指導は、学生のモラトリアム延長を助長し、自立意識の欠如、延いては学生の成人感の低さを社会に認識させたと考えられる。このような背景を考えると、菊池・安達（1985）の指摘する「高等教育機関としての大学が、その教育実践の前提としている『学生像』と、現実の学生の意識や行動の諸相とが、著しくかけ離れたものになってしまっているという事実」が出来上がるのは頷ける。

7. 目的

上述したように、近年、学生の自立意識の低さ、延いては成人感の低さが懸念される。しかし、彼らがどのような成人感を持ち、自分を成人と捉えているか否かについては明らかでない。よって若者の成人感について明らかにする事は社会的に意義のあるものと思われる。また、先に取り上げた菊池・安達（1985）による研究は30年以上前のものであるため、現在も引き続き同様の結果であるかの検証が必要と考えられた。そこで本研究は菊池・安達（1985）の研究手法に則り、大学生の成人感について検討する事を主な目的とする。具体的には、自分を成人と認識する要因（発生因）と自分をまだ子どもと認識する要因（阻止因）について調査を行い、学年間（1年生と4年生）を比較する事で年齢による成人感の変化を検討する。

方 法

1. 調査協力者

調査は、大学1年生（男性16名、女性28名）、平均年齢18.4歳（範囲：18－22歳）と4年生48名（男性24名、女性24名）、平均年齢21.8歳（範囲：21－43歳）、計92名を対象に調査を実施した。

2. 調査手続き

2018年6月、授業の一部を使用し集団一斉調査で実施した。その際、倫理面の配慮として、調査の内容について説明を行い、個人情報の保護や調査協力の任意性について伝えた。その後、その場で回答を求め調査者が回答用紙を回収した。調査の所要時間は10分から15分程度であった。

3. 調査項目

1) 社会的デモグラフィック要因

調査協力者の属性を明らかにするために学年及び性別、年齢について回答を求めた。

2) 成人感に関する質問項目

調査協力者の成人感について明らかにするために菊池・安達（1985）で使用された成人感に関する質問項目の内、「あなたは自分を『もう大人』だと思いますか。それとも『まだ子供』だと思いますか。」という質問を用い、「もう大人だと思う」と「まだ子供だと思う」の選択肢から回答を求めた。さらに、「なぜそう思うのですか。その理由を書いてください。」という先の質問の回答に対する理由を自由記述で求めた。

4. 分析方法

分析では、計量テキスト分析やテキストマイニングのためのフリーソフトである樋口のKH Coder（Version3. Alpha. 09h）を用いて計量テキスト分析を行った（樋口，2014）。計量テキスト分析とは、テキストデータの中から自動的に単語を抽出し、統計的手法を用いて探索的な分析を行うものである。それによって出現パターンやルール、延いては新し

い知識の発見を目指す事ができ、質的データをコーディングによって数値化し計量的な分析手法を適用してデータを整理、分析、理解する方法である（浜崎・黒田, 2017）。研究者の規範や思いなどを規定とした恣意的な分析を排除し、客観的に質的データの内容を書き出す上で有用な方法であると考えられている（浅沼, 2018）。分析をするにあたって、テキストデータである自由記述の回答を分析が行えるように、学年別で質問項目1と2を整理し、記述回答の内容に誤字脱字があった場合には、元の回答の伝える意味内容を崩さないよう修正した。また、ですます調などの文体についての修正は行わない形でデータの形式を整えた。

結果と考察

1. 学生の自己認識

問2「あなたは自分が『もう大人』だと思いますか。それとも『まだ子ども』だと思いますか。」という質問に対する、学年別の自己認識の結果を算出した。「もう大人」と回答した1年生は15.9%、4年生は43.8%となり、一方、「まだ子ども」と回答した1年生は84.1%、4年生は56.3%であった。よって、4年生の方が自分を「もう大人」と認識する者が多く、1年生に自分は「まだ子ども」だと認識する者が多い事が示された。

2. 阻止因の比較

「もう大人」「まだ子ども」の回答の選択理由を自由記述で求め、その内容を総合的に把握するため、「もう大人」の回答を成人感の発生因、「まだ子ども」の回答を成人感の阻止因として、学年別の阻止因と発生因の回答内容における頻出語をKH Coderで抽出した。なお、出現回数が1回のみの単語は省略した。

①頻出語分析

まず、青年が自分を大人と感じない要因に関する発達の違いを明らかにするために、大学1年生と大学4年生の成人感の阻止因の分析を行った。分析に

は、計量テキスト分析を用いた。Table1 は、1年生と4年生の阻止因の記述内容における頻出語を示したものである。4年生の方が抽出された単語数が多く、1年生よりも自分を大人かどうか判断する際に様々なポイントが挙げられる事が伺える。Table1より、両学年で「親」が最も頻出する単語として抽出されており、「親に頼っているから」「親に○○してもらっているから」などの内容が多く、親に頼ることが自分を子どもだと評価する一番の要因になっている事が考えられる。

Table 1 1年生と4年生の阻止因の頻出語.

1年生		4年生	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
親	14	親	12
自分	8	思う	7
頼る	8	自分	7
思う	7	自立	7
自立	6	お金	3
子供	5	子供	3
成人	4	社会	3
多い	4	受ける	3
大人	4	生活	3
お金	3	多い	3
完全	3	働く	3
銀行	3	養う	3
生活	3	援助	2
ルール	2	学生	2
管理	2	学費	2
知る	2	言う	2
分かる	2	考え	2
暮らし	2	行動	2
未成年	2	出す	2
		生きる	2
		精神	2
		責任	2
		大人	2
		払う	2
		頼る	2

次に「自分」「自立」「お金」「生活」などの頻出語が抽出された。「自分でできない事が多い」「自立できない」「自分のお金がない」といった自らが学生であるために経済面や生活面で親に頼り、自分だけではできない事の多さを感じている点が挙げられたと考えられる。また、「子ども」という単語も頻出しており、1年生では「子どもでいたいから」という子ども性への依存を表す理由が多い。一方、

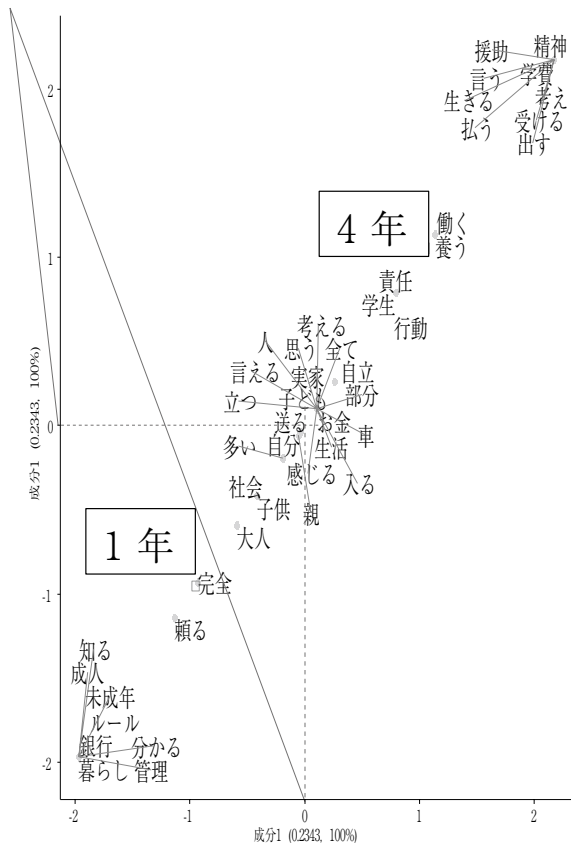


Figure1 1年生と4年生の阻止因の対応分析.

4年生では「大学生のうちは子ども」「親からの援助があるうちは子ども」という経済的理由が挙げられており、自分が子どもであるとする評価の基準として注目する点が異なっている事が示唆された。「子ども」という言葉に関して、1年生は、大学生からは高校生の頃よりも一気に「大人」を求められるようになるが、当の学生にとってそれに応える事が容易ではないために「子どものまま」でいる事を望むのではないかと考えられる。4年生に「子どもでいたい」以外の理由が見られたのは、大学生活を通して自分の中の大人像がより明確なものとなり、その大人イメージと現在の自分を比較した際の差によるものだと考えられる。

②対応分析

Figure1 は、上記の分析結果を対応分析で示したものである。対応分析では単語の省略の処理は行わなかった。対応分析は変数間の差や類似性を探索す

る方法で、出現パターンの似通った単語を探る事ができる。散布図上で見出し語付近に配置される単語程その見出し語を特徴づける単語であると解釈でき、見出し語同士の分布が近いと見出し語同士の類似性が高いと解釈される（樋口，2014）。

Figure1 より、「実家」「生活」「自立」「お金」等生活面に関する単語が普遍的（特徴がない）な単語として示され、「言える」「考える」「感じる」「思う」等、自分と大人を比較したときに感じる内容の語も普遍的な語として抽出された。これらの単語は、1年生と4年生が自分を子どもと判断する理由を述べる際に最も出現する単語であると言う事ができる。また、1年生と4年生にはそれぞれ突出した特徴語がある事がわかった。

1年生の特徴語には、「完全」「大人」「頼る」が挙げられ、これらの語には「完全に自立できていないから」「社会のルールやマナーを完全には分かっていないため」「20歳からが大人だと思うから」「自分で思っている理想の大人にはまだまだ遠い」「一人でなんでもできるようになったら大人」「親に頼っている」「自分でできる事もあるが、わからない事も多く親に頼る」等の記述回答があった。これらの内容から1年生は大人に「親から完全に自立した、自分一人でなんでもできる人」というような人物像を持っていると考えられる。突出した特徴語には「知る」「成人」「未成年」「銀行」「暮らし」「分かる」「ルール」「管理」の単語が挙げられた。これらの語には「銀行に行って通帳を作ろうとしたが、番号札を取らないといけないう事を知らず、無駄な時間を過ごした」「成人していないから」「20歳未満は未成年で、何かするときに保護者の承諾が必要なことが多いから」「1人暮らしをしておらず、家事の全てを自分でやっていないため」「親がいないと分からない事が多い」「社会のルールやマナーを完全には分かっていないため」「自分の管理面でまだ親に頼っているところがあるから」等の理由の記述回答があった。これらの内容から、1年生は自分が未成年である事や自分ではできない事、知らない事が多いという事を認識

し、自分が大人ではないと評価し、現在の自分と自分の持つ大人像を比較し、自己の未熟さを自覚していると考えられる。

4年生の特徴語には「行動」「責任」「学生」「養う」「働く」という単語が抽出された。これらの特徴語には「自分の行動全てに責任をとれるかを考えると、まだ自分勝手な行動をしてしまったりするから」「責任を負う事に抵抗があるから」「学生だから」「働いていないから」等の記述回答があった。これらの内容から4年生は「学生ではなく、働いていて自分の行動に責任が取れる人」という大人像を持っているという事が示唆される。突出した特徴語には「生きる」「援助」「精神」「言う」「出す」「受ける」「払う」「考え」「学費」が抽出された。「親から援助を受けないと生きていけないから」「精神的にまだ未熟だと思うから」「わがままや理不尽な事を言ったりするから」「親にお金を出してもらっているから」「親に学費や生を送るためのお金を払ってもらっているから」「考えが幼いから」等の理由の記述回答があった。ここでの「援助」がどのような援助かは具体的には表記されていなかったが、生活全般における援助として考えるならば、彼らは「親からの援助を受けておらず、精神的にも成熟した人」という大人像も持っている事が考えられた。4年生は自分の持つ「学生ではなく、働いていて親からの援助を受けていない、自分の行動に責任のとれる精神的に成熟した人物」という大人像と現在の自分の差によって自分を「子ども」と評価していると考えられる。

抽出語と対応分析の結果より、1年生と4年生で多くの共通する単語が抽出され、「大人」をイメージする際に普遍的な部分が存在する事が示唆された。また、1年生よりも4年生の方が「大人」への具体的で明確なイメージを持っているという事が示唆された。1年生も4年生も自分の持つ「大人」イメージと自分とを比較し自己評価をしており、4年生では1年生の頃よりも様々な面で成長しているが、より具体的になった大人イメージと自分との比較によって新たに自分に足りない部分を見出している

Table 2 1年生と4年生の発生因の頻出語.

1年生		4年生	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	9	自分	12
持つ	3	責任	6
責任	3	行動	5
お金	2	大人	4
意見	2	超える	4
稼ぐ	2	考える	3
行動	2	歳	3
		人	3
		成人	3
		増える	3
		1つ	2
		過ぎる	2
		気持ち	2
		考え方	2
		子ども	2
		思う	2
		自立	2
		社会	2
		主体	2
		周囲	2
		他人	2
		優先	2
		予約	2

考えられる。

3. 発生因の比較

①頻出語分析

現代の青年が自分を成人と感じる要因（成人感の発生因）に関して、発達の違いを明らかにするために、学年別（1年生、4年生）で成人感の発生因について分析を行った。

Table2 はTable1 と同様の手順で1年生と4年生の発生因の回答における頻出語を示したものである。阻止因と同じく4年生の方が抽出された語が多く、発生因においても4年生は1年生より多くの理由が挙げられている事から、4年生では日々の生活の中で自分の成長や変化を1年生よりも顕著に感じていると考えられた。Table2 より、両学年で「自分」「責任」「行動」が共通する特徴語である事が見てとれる。大学生になり生活の中で自ら選択する機会が増え自分の行動に責任を持たなければならない事を実感し、

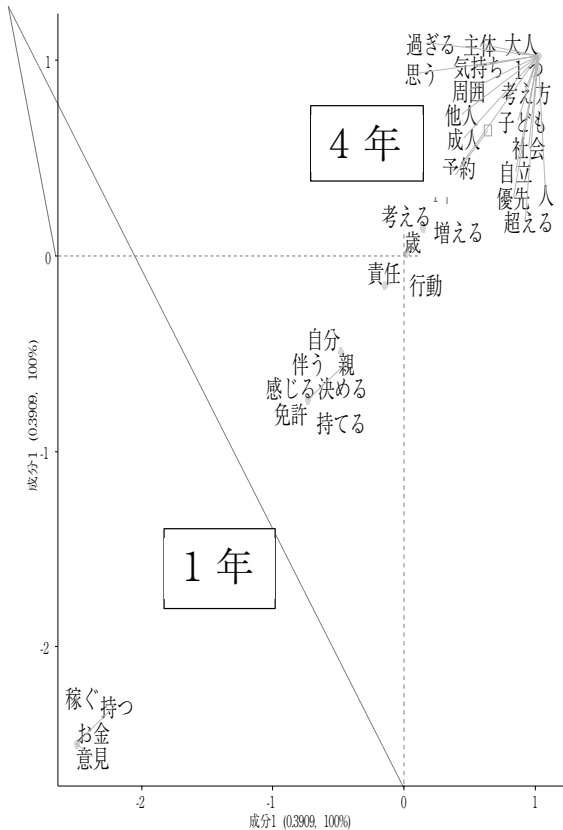


Figure2 1年生と4年生の発生因の対応分析.

両学年での成人感を感じる共通の要因となっていると推測される。

②対応分析

Figure2 は上記の結果を対応分析で表したものである。Figure2 より「自分」「行動」「責任」「歳」「決める」「持てる」「伴う」「免許」「親」「感じる」「考える」「増える」が普遍的な語として抽出された。これらの単語は、大学1年生と4年生の自分を大人であると判断する理由を述べる際に最も出現する語と言う事ができる。先の内容と重複するが、大学生になることで自分に「責任」を「感じる」、責任が「増える」と感じ、考え方が変化する事が成人感を実感する事につながっていると考えられる。各学年の特徴語として、1年生では「稼ぐ」「持つ」「お金」「意見」が抽出された。これらの特徴語には「バイトをしてお金を稼いでいる」「自分の意見や考えを持っているから」等の記述があった。大学生になれば多

くの者がアルバイトをしている。大学生にとってアルバイトはお金を稼ぐことはもちろん、社会に出る前に社会について学ぶ事のできる重要なものだと考えられる。記述内容では、自分で「お金を稼ぐ」事が大人として評価される点であるとされている。しかし、田村・木村・三井・松瀬（2011）は、大学生はアルバイトでお金を稼ぐことを通して日頃の学業や課外活動にはない行動面、精神面を含めた様々な経験によって、自分の成長する姿を意識するのではないかと述べている。そのためアルバイトによって「お金」を「稼ぐ」ことは大学生にとって自分の成長が感じられる重要な活動の一つであり、自分が大人だと感じる要因になっていると考えられる。また、大学では高校生の頃よりも自分の意見や考えを求められる場面が増え授業ではグループ活動が多く取り入れられるようになる。「自分の意見や考えを持つ」必要性が増し、それらに対応できることで以前までの違いや成長を感じる事に繋がるのではないかとと思われる。自己の内面的世界を他者に知らせるという行為は社会的存在としての人間には欠かす事のできないものとされている（榎本、1987）。また、安藤（1986）によると、心理学者であるJourard（1971）は自己開示と精神的健康との関係に注目し、パーソナリティの健全な発達には適切な相手に対する適切な水準の自己開示が不可欠である事を強調したと述べている。学生の中には、県外で大学生活を送っている者や顔馴染みの少ない大学に進学した者等様々な学生がおり、対人関係でストレスを感じる者も少なくない。そのような環境で、これまで以上に自己開示の重要性を本人たちが一番理解している結果なのではないかと考えられる。自己開示を実行するかどうかは個人によるが、「意見」を「持つ」事が大人である事の1つの条件であるという認識がされていると考えられる。

4年生で抽出された単語は、単語間の繋がりから見て4つのまとまりに分ける事ができると考えられた。

第1のまとまりは「成人」「超える」「過ぐる」「思う」

の言葉から構成されており、「成人しているから」「20歳を超えたら大人だと思う」等、年齢を基準とした考え方を表していた。日本では20歳以上の者を成人と定義しており、単独で法的行為が行えるようになる。成人を子どもと大人の区切りとして考えている者は多く、調査対象の4年生もこれと同様の考えを持つ者が多い事がわかった。

第2のまとまりは「優先」「他人」「主体」「周囲」「一つ」「考え方」「気持ち」の言葉から構成されており、「自分のやりたい事だけを優先しなくなった」「考え方が自分主体から他人主体になった」「自分の行動が周囲にどう影響するのか等、配慮が考えられるようになった」等、周囲への気遣いができるようになる事を重視した考え方を表していた。様々な人の集まる大学では周囲への気遣いが必要となり、健やかな大学生活を送るうえで大切な事である。再びアルバイトを取り上げて考えるが、アルバイトはお金を稼ぐことはもちろん、社会での礼儀や組織の在り方を知り様々な人との出会いによって仕事や就職に関する有益な情報を得る事や、人生のためになるような話を聞く機会になり得る。アルバイト活動は「社会勉強」もしくは「人間形成」のための重要な機会として認識されている所もある（田村ら、2011）。1年生はアルバイト活動によってお金を稼ぐこと自体に「大人」を感じているようだが、4年生ではアルバイト活動によって得られた経験値（例えば、社会人との関わりを持つことで、社会や人に対する考え方が変化する）を「大人」と感じていると考えられる。

第3のまとまりは「大人」「予約」「社会」「子供」等の言葉から構成されており、「大人だからと言われる事が増えた」「予約をするときに『大人〇人』と、自分を含む同世代を大人と呼んだから」「社会に出るから」、「子どもの頃は良かったと感じるようになった」のような、外的要因によって大人だと感じるという考え方を表していた。高橋（2001）による、小学校の児童に自己肯定感を高めるための実験授業を実施し、授業を受けた児童は自己肯定感が高まっ

たという報告がある。このように周囲からの働きかけによって対象者の意識や考え方は変化する事が示されている。「大人」「予約」「子供」に関して、自分では「大人」だと思っていなくても周囲からの対応や世間的な認識や雰囲気により、自分は「子ども」ではなく「大人」になったのだと改めて気づかされていると考えられる。世間の認識的に店を予約する際に「子ども」で予約する事はできなくなり、周囲からの「大人」扱いが彼らに「子ども」の時よりも不便や不満を感じさせているのではないかと思われる。また「社会」に関しても同様に、外的要因による考え方だと思われる。今日の青年の多くは高校卒業前に進学か就職を選択し、進学を選んだ者は大学や専門学校に進む。そして大学卒業前に再び進学か就職かを選択し、その多くは就職する。中には働きたくないと思う者もいるかもしれないが、そういう思いを持ちつつ皆が就職を目指す。これは世間の常識的や周囲からの期待によるところも多いのではないかと考えられる。よって、「社会」についても「大人」「予約」のように外的要因である周囲からの期待によって生じる考えなのではないかと考えられる。

第4のまとまりの「自立」では、「親から自立したから」「自立に向けて動き出しているから」等の親から「自立」することが大人であるという考え方を表していた。大学生の自立について研究した大石・松永（2008）によると、自立は多側面からなる概念であり（渡邊、1991b、1992・福島、1992、1996・高坂・戸田、2006）、自立を構成する側面をどう捉えるかはそれぞれの研究の対象や視点によって様々であるが、これらの研究に共通してみられたのは、心理的自立、経済的自立、社会的自立の3側面であった。就職して自分でお金を稼いでいても実家で暮らしている事は珍しくはない。実家で暮らしていても経済的に自立している人もいると思われる。また、調査で得られた結果では自己の精神的成熟に関する記述内容が多かった事から、ここでの自立は「心理的自立」として扱う事とした。青年期には親から精神的に自立する事を表す「心理的離乳」が訪れる。心理

的離乳によって、青年はそれまでの親との依存的な関係に対して親密な関係を維持しつつも分離し個性ある存在へと移り変わっていき、青年と両親との関係は一方的な権威の型から相互性へと再交渉される事によって変化していく（小嶋、1998）。これまで親に自分の相談に乗ってもらっていた関係から、今度は自分が親の相談に乗るようになるなど、以前の親と子の関係から対等な一人と一人の関係になる。そうすることで普段の生活にも変化が生じ、自身で変化を感じるようになると考えられる。

総合的考察

阻止因と発生因の抽出語と対応分析の結果より、1年生と4年生で多くの共通する単語が抽出され、「大人」をイメージする際に普遍的な概念が存在する事が示唆された。また、1年生よりも4年生の方が「大人」への具体的なイメージを持っているという事が示唆された。

調査では学生の成人感の阻止因に「子ども」という単語が登場したが、1年生では「子どもでいたいから」、4年生では「大学生のうちは、親からの援助があるうちは子ども」というように学年でその意味合いが異なる事がわかった。小嶋（1998）は、大学進学希望者の進学理由には、「希望する職業に就くために学歴や資格が必要」「給与や昇進の面で大学の学歴を持っていた方が有利」等の合理的意識に基づくものの他に、「自由な時間を持つ」「大学へ入ってから将来の進路を決めるため」「勉強する」「友人を得るため」等のモラトリアム期を求めるような理由を挙げる者がいる事を報告している（総理府広報室『将来選択期（15～19歳）における青少年の意識調査』、1980）。すなわち小嶋（1998）は、大部分の青年にとって大学等に進学する事は将来を開拓するためのもので、その上で多少の教養を身につけ大学生活を満喫するというのが実情である事を指摘している。保坂（2015）は、今日では大学進学は珍しい事ではなく、明確な目的がなくても高校の雰囲気や親からの勧めによって進学する者は少なくない事を

述べており、大学に自由な時間や広い交友関係を求めていると考えられる。さらに、現役の学生は「大学は自由ではあるが、責任もある」と考えている事にも言及している。高校生までは宿題や定期テスト等、学校から目標となるものが与えられ、それにより日々の充実感が得られていたと考えられるが、大学では誰かから目標や課題を与えてもらうのではなく、自分自身で選択し決定していく必要がある。1年生が子ども性にこだわる理由には、これまでの子どもとして扱われる事の多い環境から、どこでも大人として扱われ、これまで以上に大人を要求される環境への変化にまだ適応できていないという可能性が考えられる。一方で4年生に1年生と異なる理由が見られたのは、より社会的に大人として過ごす時間の長い4年生には「大人」に対する明確なイメージと共に、大人になろうとする意識が芽生えてきたためとも考えられる。明確なイメージと意識を持ち大人になろうと挑むも、理想と現実の差を感じている。その背景には「大人」との明確な違いとして考える事のできる「大学生である事」や「親からの援助を受けている事」等が理由として挙げられたと考えられる。

また、白井（2010）は30歳女性の成人感が上昇しない事について研究している。その結果、女性の成人感の出現は、結婚等のライフイベントよりもその後の出来事との関連が強く、出来事を遂行する能力面が今後の課題となって現れると考えられた。そのため30歳女性の成人感が上昇しないのは、例えば結婚後、親や夫に頼ったり、家族を最優先に考えられるか等の日々の反省によって成人感が減少する傾向があり、成人感のなさは精神的未熟によるものだけではなく、精神的な自立に伴って新たな課題を設定する事ができるがために、それに到達できていないという事が成人感の欠如として表れていると結論付けている。本調査対象であった大学1年生と4年生においても、1年生の頃より様々な面で成長した4年生は、同時に新たな課題を設定し、それに到達していない自己の未熟さを実感していると考えられる。

1年生は、現在の自分と大人イメージを比較し、自分の子どもだと評価できる点に気づく事で未熟さを実感している事が考えられた。また、4年生は1年生と同様に現在の自分と大人イメージとの比較によって自分の未熟な部分を実感している。加えて、1年生よりも心身共に成長していると考えられる事から、自身の成長に伴い新たに自分に足りないものを見出す事で自分を子どもと評価していると考えられた。

発生因では、1年生と4年生で大人になったと感じる点が異なる事が示唆された。1年生は、高校生までの自分との違いを実感することによって成人感を得ている事が考えられた。実際、高校生までと大学生からでは社会的にできる事が増え、学生として生活する環境においてもこれまでとは大きく変わる。これまでの親や教師に管理されてきた環境から、生活の中で自分で管理しなければならない範囲が格段に広がる。このような大きな変化にうまく適応し、大学生として生活していく事は、自分が大人になったと評価できる点になり得ると考えられる。4年生では、自身の内面的な成長と周囲の変化によって成人感を得ている事が示唆された。4年生が自分を大人だと評価する理由は、年齢基準の考え方、精神的な成長の実感、外的要因、親からの自立の4点に大きく分ける事ができた。社会的に大人として過ごす期間が1年生よりも長い4年生には、大人になる必要性を感じそれを周囲からも求められている事を実感しているのではないかと考えられる。

本研究では、テキストマイニングを用いた質的研究のみを行い、大学生の大人に対するイメージや、大学生になったばかりの1年生と、就職を迎える時期に面した4年生が自分に対してどのような認識を持っているのかを知ることを検討する事ができた。しかし、本研究の限界として以下の点が指摘される。まず、調査前に研究テーマであった「成人感」という言葉に対する具体的な説明を行わなかった事で、調査協力者に不明瞭な事柄に対して回答してもらった形になった可能性が考えられた。また、自由

記述の内容のみを用いて検討しているため、他の検討材料を用いた比較研究をする事で多角的に検討できると考えられる。よって、今後の研究では尺度作成などを通して量的調査をしていく必要があると考えられる。さらに、本研究は地方の私立大学で行われたが、自己意識の変化には社会的な影響が強いと考えられるため、一般性を確認するためには幅広い地域の大学生を対象に調査を実施する必要があると考えられる。成人感に関する研究はいまだ数が少なく、研究結果の蓄積が求められる。

付記

本研究は2018年度に仁愛大学人間学部心理学科に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものです。調査協力者の皆様と、本論文の作成にあたり、ご指導頂いた竹村明子先生に、心より御礼申し上げます。

引用文献

- 安藤 清志 (1986). 対人関係における自己開示の機能 東京女子大学紀要論集, 167-199.
- 浅沼 裕治 (2018). 子供の性別・発達段階で異なる父子家庭の父親の家族ケアの困難性 (1) —6名の父親の語りにおける軽量テキスト分析をふまえて— 中京学院大学短期大学部研究紀要, 48, 1-13.
- 榎本 博明 (1987). 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について心理学研究, 58, (2), 91-97.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (小此木 啓吾 (訳) (1973). 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房.)
- 福島 朋子 (1992). 思春期から成人にわたる心理的自立—自立尺度の作成及び性差の検討— 発達研究, 8, 67-87.
- 福島 朋子 (1996). 成人における自立観—概念構成と性差・年齢差— 仙台白百合女子大学紀要, 1, 15-26.
- 樋口 耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト

- 分析—内容分析の継承と発展を目指して— 株式会社ナカニシヤ出版.
- Havighurst, R. J. (1953). *Human Development and Education*. NY: Longmans & Green. (荘司雅子 (訳) (1958). 人間の発達課題と教育—幼年期より老年期まで— 牧書店.)
- 保坂 裕子 (2015). 大学生は自らが「大学生である」ことをどのように意味づけているのか —ピア・グループインタビューによるナラティブ・アイデンティティ分析の試み— 兵庫県立大学環境人間学部, 17, 29-38.
- Jourard, S. M. (1971). *The Transparent Self*. Rev. ed.. New York: Van Nostrand Reinhold. (岡堂 哲雄 (訳) (1971). 透明なる事故 誠信書房.)
- 菊池 竜三郎・安達 喜美子 (1985). 現代青年における「成人感」の発生とその社会的規定要因 (1) —問題発見的考察— 茨城大学教育学部紀要、人文・社会学科・芸術, 34, 111-129.
- 高坂 康雄・戸田 弘二 (2006). 青年期における心理的自立 (Ⅱ) —心理的自立尺度の作成— 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 56 (2), 17-30.
- 小嶋 明子 (1998). 高校から大学へ—就職・進学への移行— 会沢 勲・石川 悦子・小嶋 明子 (編). 移行期の心理学—こころと社会のライフ・イベント— ブレーン出版, 115-146.
- 内閣府 (1980). 『将来選択期 (15～19歳) における青少年の意識調査』.
- 向田 久美子 (2017). 発達心理学概論 放送大学教育振興会.
- 溝上 慎一 (2002). 大学生論 戦後大学生の系譜を踏まえて ナカニシヤ出版.
- 溝上 慎一 (2010). 現代青年期の心理学 適応から自己形成の時代へ 有斐閣選書.
- 大石 美佳・松永 しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成—日本家政学会誌, 59, (7), 461-469.
- 小此木 啓吾 (1978). モラトリアム人間の時代 中央公論社.
- 白井 利明 (2010). 30歳の女性はなぜ自分を大人と思わないのか—縦断的研究—大阪教育大学紀要第4部門, 58, (2), 77-87.
- 高橋 あつ子 (2001). 自己肯定感促進のための実験授業が自己意識の変化に及ぼす効果 教育心理学研究, 50, 103-112.
- 田村 隆宏・木村 信貴・三井 理愛・松瀬 誉幸 (2011). 大学生の心理的well-beingに及ぼすアルバイト活動の影響 鳴門教育大学研究紀要, 26, 43-52.
- 渡邊 恵子 (1991). 自立と自己の性の受容—女子大学生の場合— 日本女子大学紀要人間社会学部, 2, 83-95.
- 渡邊 恵子 (1992). 自己と自立の性の受容 (2) —性差の検討— 日本女子大学紀要人間社会学部, 3, 1-14.